

悲劇を決して忘れず 復興への着実な歩みを

東日本大震災 10年



2011年3月11日14時46分。最大震度7の揺れが日本を襲い、この川口市でも多くの被害が発生。東北地方では直後に津波や原発事故が重なり、未曾有の大災害となりました。あれから10年。被災地は徐々に復興していますが、いまだその途上にあります。そして、同じような災害が、いつ、どこで再び発生してもおかしくなく、私たちも自らの問題として当時を振り返り、防災への意識を強くすることが必要です。



2012年(平成24年)



2018年(平成30年)

震災で奪われた日常
復興を続ける日々

▲岩手県大槌町では土地区画整理事業で土地のかさ上げなどが行われ、道路、宅地の整備が進んでいます。



震災前



震災直後

▲岩手県陸前高田市の震災前と震災直後の様子。津波が街を襲い、甚大な被害を受けました。

震災直後の救助活動



震災後の川口市内では…

市内の住家には全壊1件、半壊3件のほか231件(鳩ヶ谷市(当時)含む)の一部損壊被害が発生し、東スポーツセンターではプールの天井が一部崩壊するなどの大きな被害が発生しました。JR京浜東北線は12日朝9時まで復旧せず、当日の夜は、都内から川口まで多くのかたが徒歩での帰宅を余儀なくされました。

また、本市では公共施設などで主に福島県から避難してきたかたがたを受け入れ、最も避難者が多かった西スポーツセンターでは、合計76人のかたが5月16日まで避難生活を送りました。



▲原発事故の影響で電力がひっ迫し、計画停電が行われました。川口駅周辺も灯りが消え、信号機が止まった交差点では、警察官による交通整理が行われていました。

▲地震直後の川口駅前(キュポ・ラ広場)は、帰宅困難者で溢れ返りました。

復興を見届けるまで、あの光景を忘れない。

おにさわ なおき
鬼沢 直樹

緊急消防援助隊埼玉県隊の一員として
岩手県陸前高田市にて災害救助業務に従事

派遣期間 平成23年 3月11日～15日
3月27日～31日

3月11日、生まれたばかりの子を妻に託し、緊急消防援助隊の活動に従事するため、私は北消防署に向かいました。被災地と連絡が取れず詳細な状況が不明な中、岩手県の沿岸部に向かうことが決まり、何か言い知れない不安を感じながら、21時53分、現地向けに出発しました。

12日15時頃、水沢インターチェンジで高速道路を降り、サイレンを鳴らし緊急走行を開始しました。道すがらすれ違う、被災者と思しきかたがた。その多くが、私たちの消防車両に両手を合わせ、拜まれるような現場とはどのような状況なのだろうか。待ち構えているであろう惨状を思い、全身が粟立つのを感じました。

い地域に出くわしました。それは想像をあっけなく超えた光景でした。津波が、家や店などの建物、自動車や公園、木々、人の営みのすべてを飲み込み、まぢが消えていました。

18時33分、陸前高田市内の野宮地に到着。同市の消防のかたから現状の説明を受け、翌日から実施する救助作業の打ち合わせを行いました。このかたは、ご自身の家族の安否もわからない中で職務にあたっていたそうです。力になりたい。隊の心が一つになった瞬間でした。

13日7時から救助活動を開始。安否不明者の情報を基に、隊員が一定の地区を縦断し、生存者を発見、救出するものです。幾重にも重なった瓦礫の山から、手作業で生存者を探していきま

す。私は、災害救助への派遣にあたっては、市を代表する気概を持って活動すると心に決め、常日頃から準備をしてきました。川口市の消防隊は平成7年の阪神・淡路大震災の際、全国に先駆けて救援隊を送っています。神戸市の消防のかたから聞いた先輩がたの在り方は本当に誇らしく、私たちもその活躍を見習い、可能な限り速やかに被災地に入り、活動を開始しました。

津波の力は恐ろしいものでした。惨状と空気が、このとき見たもの以上に想像を絶すると表現できることには、生涯出会わないかもしれないかもしれません。探しても探しても、発見できなかったのは生存者ではなく、亡くなっているかたばかりでした。私は、ご遺族にできるだけお身体をお返しすることが使命であると考え



▲車内からの救出活動。余震が続き、断続的に津波警報が発令される中、懸命な救助活動が続いた。



えを切り替え、心を奮い立たせ、作業に没頭しました。ご遺体は近隣の公共施設などに移送後、安置されますが、どの施設もすぐにいっぱいになっていきました。

15日15時、第1陣の派遣期間を終え、2陣へと引継ぎを済ませた瞬間、全身が弛緩していくのを感じ、初めて自分が極度の緊張状態にあったことを知りました。早く家族のもとに戻り、安心させてあげたい。唯一の思いでした。

撤回の際には陸前高田市長から「我々は必ず復興して、この場で待っています。ぜひまたいらしてください」と熱い思いを伝えられ、隊員たちと再訪する未来を語り合いました。しかしながら、未だ私は約束の地へ向かうことができません。10年の年月を経て、当時のことを思い出すと目頭が熱くなり、胸が締め付けられます。いつの日か、あのとき刻まれた凄惨な記憶と、まざまざと思い知らされた無力感を乗り越え、復興を遂げたまぢの姿を見届ける。その心に決めていきます。



復興の10年。これからも、交流を続けたい。

おがたりょうすけ
緒方 亮介

岩手県大槌町に土木職として派遣
復興計画、用地交渉などに携わる

派遣期間 平成24年10月～1年間
平成29年10月～1年間

大槌町に赴任した私が初めに目にしたものは、津波に流され何も残されていない広大な土地。道の脇に高く積まれたままになっている、建物などの残骸、瓦礫の山でした。発災から一年半ほどの時間が経過していましたが、「震災」は続いていることを感じ、私たちが行う事業の重要性、携わる責任をあらためて心に刻むことになりました。

復興事業では、100年に一度クラスの津波を防ぐ防潮堤を整備し、住民のかたがたには、町が高台に造成する宅地に移転するか、土地のかさ上げなどにより安全に居住できるようにした区域に住宅を再建していただくこととなります。私の最初の業務は、被災されたかた一人ひとりにから住宅再建の意向を伺い、復興計画に反映させることでした。

拒絶されていた地権者のかたからも「よくやってくれたな」と労をいたしてくれ、町の力になれていたことを実感でき、とても嬉しかったことを覚えております。平成28年に個人的に町を再訪した際には、造成工事が始まり徐々に進んでいく復興を感じ、住民の皆さんに暖かく迎えていただいたことは感慨深いものがありました。



大槌町はやさしい気質のかたが多いとはいえ、現地で被災者をしていない、とすれば「よそ者」であった私たち派遣職員が、最初からすべての住民に受け入れられてはいなかったかもしれません。しかし、日々やりとりを続け、粘り強くご意見を伺うことで、少しずつ、その距離は近づいていったと思います。

1度目の派遣期間終了の際には、当初コミュニケーションを